

連携大学院の協定調印

大学院教育を行うにあたり大学が外部の研究機関と協定を結んでこれを行うシステムを「連携大学院」といい、研究機関の研究者が大学院の教官に就任し研究所内で大学院生を学位取得まで指導する、この新しい教育方式が大学改革の一環として広がりつつあります。

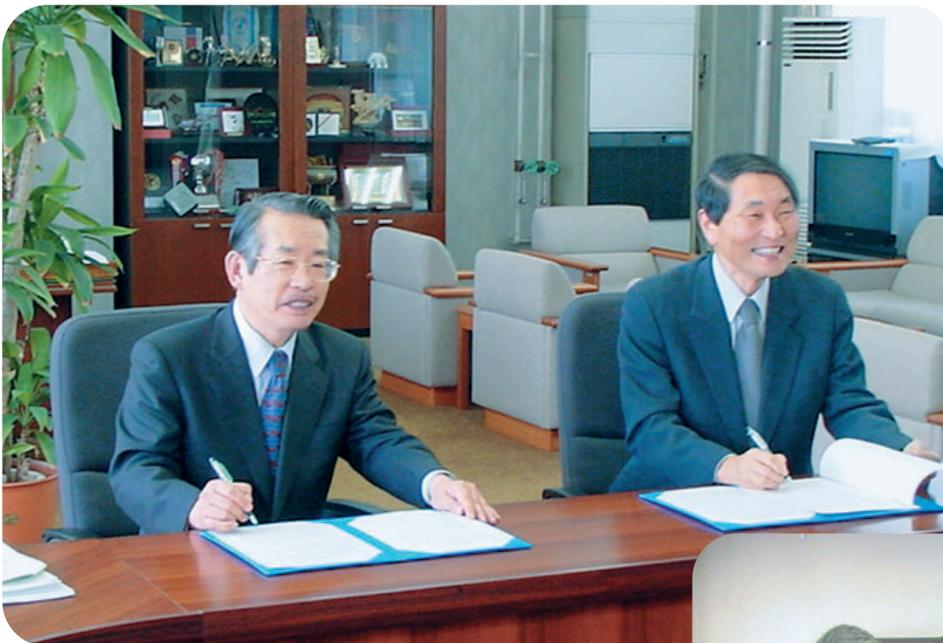
畜産草地研究所と宇都宮大学農学研究科および東京農工大学連合大学院との間でも本年4月から連携大学院にかかわる協定が取り交わされ、4月12日、宇都宮大学において調印式が行われました。式には当所から横内理事、清水副所長、古川研究調整官、客員教授、助教授に任用された畠中飼料生産管理部上席研究官、西田家畜生産管理部主任研究官、板野草地生態部室長らが、宇都宮大学からは田原博人学長他5名の方々が出席されました。調印にあたって田原学長から、両者の協力関係をますます強固なものとし、社会への貢献を果たしていきたいとの挨拶

が、横内理事からは資源循環、土地利用を見据えた教育のお手伝いをしていきたいとの挨拶がありました。

今回設置された連携研究分野は「資源循環・土地利用型畜産学」といい、当所の研究推進方向とも合致する環境保全的循環型社会の発展に貢献できる研究者、専門家の育成を図ることを目的としたものです。今年度の本分野への進学者は修士課程2名、博士課程1名で、3名の新任教官は畜産廃棄物の処理・利用に資する物質変換学、物質循環学、草地生態保全学など、それぞれの専門分野を活かして、早速、大学院生の指導に取り組むことになります。

「研究」と「教育」はある意味で表裏一体をなすものではないかと思います。連携という形での教育への取り組みがますます研究の発展につながるものと確信しています。

(企画調整部研究交流調整官 寺田文典)



田原学長(右)と横内理事(左)による調印式



客員教官辞令の交付